



三角屋根の建造物が並ぶブリッゲン地区

Wooden buildings and alleys, Bryggen

# 木造建築物と木製の路地「ブリッゲン」

## ノルウェー・ベルゲン

Special Features / Civil Engineering Heritage VIII



SASAKI Masaru

特集  
土木遺産 VIII  
北の地に根付く文化(ノルウェー・デンマーク・スウェーデン・北海道)

基礎地盤コンサルタンツ株式会社/保全・防災センター/物理探査部  
佐々木 勝(会誌編集専門委員)

### 三角屋根の木造建造物群

ノルウェーの首都オスロから西へと延びるベルゲン鉄道の終着駅、ベルゲンはオスロに次ぐノルウェー第2の都市である。ベルゲン駅から北西に向かって10分ほど歩くと、魚市場で賑わうベルゲン港が見えてくる。氷河によってU字に深く浸食されたフィヨルドと多くの島に囲まれた港に向かうと、港に面した北東側に三角屋根の木造建造物が立ち並ぶ一角が望める。この場所が「ブリッゲン」と呼ばれる地区である。

ブリッゲン地区は14世紀頃にドイツから来たハンザ商人たちが商館を開設し、居住を許された地域である。港に面した正面はカラフルで見栄えの良い建物が並んでいるが、その内側には細い路地が迷路のように張り巡らされている。建物の壁や庇が間近に迫り、見上げれば階段や渡り廊下がとろ狭く突き出ており、ただでさえ狭い空間をさらに狭隘にしている。

入って良いものかと戸惑いながら路地を進むと、両側に迫りくる木造の壁は圧迫感を醸し出し、昼間でも薄暗

く感じる。回廊のような軒下や歪んだ壁面、上へ上へと伸びた建物は立体感を狂わせ、まるで古い絵画の中にも入ってしまったかのような感覚に陥る。

そんなブリッゲン地区を散策していると、ふとこの路地までもが板張りであることに気付く。ヨーロッパの街並みは石畳で整備されているところが多く、ベルゲンの市内も石畳の道が多い。しかし、この地区においては一部を除き、足元は木製の板張りで統一されている。

なぜ、ブリッゲン地区の路地は木で造られているのだろうか。

### ブリッゲン地区の成立とハンザの繁栄

ベルゲンは1070年ノルウェー国王オラフ・ヒツレによって築かれた都市である。12～13世紀にはノルウェーの首都であったこともあり、北欧最大の商業都市として栄えていた。

しかし、ドイツ商人によるハンザ同盟が東西交易により急速に力を伸ばし、交易の実権を握られてしまった。

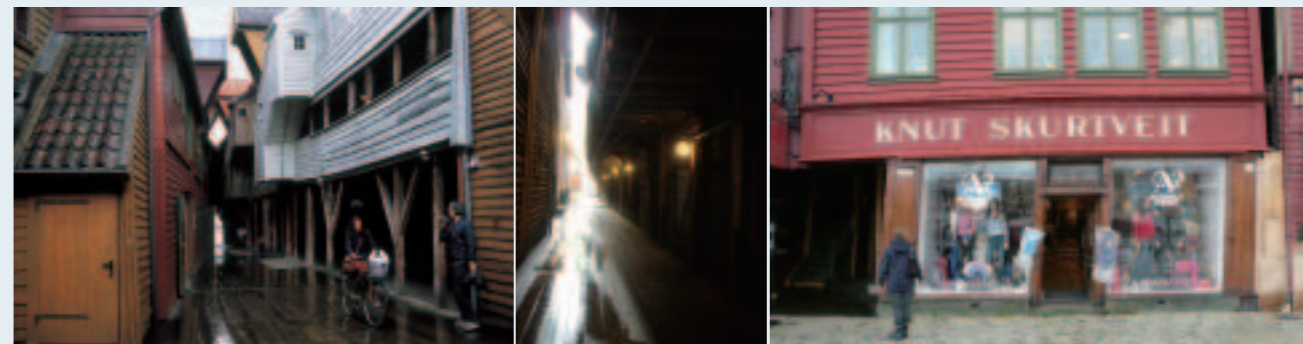


写真1 階段や渡り廊下が張り出す木製の路地 写真2 回廊のような軒下 写真3 歪む建物の入り口

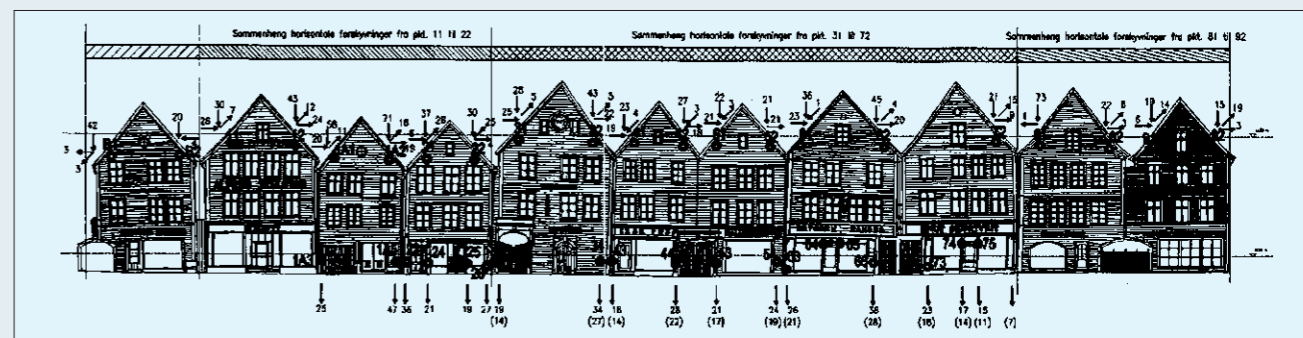


図1 傾いているブリッゲンの建物

そのことに危機感を抱いた国王エーリック2世は、1282年に彼らの活動を制限するが、逆にハンザの経済封鎖を受け、この力に屈することとなった。14世紀中頃にはベルゲンはハンザ同盟に加わり、港に面して「テイスクリッゲン(ドイツ埠頭)」と呼ばれるドイツ人居留区が設けられた。そこがいつしか「ブリッゲン」と呼ばれるようになった。

西岸海洋性気候に恵まれたベルゲンは、冬でも北緯60度のわりには温かい気候である。暖流であるノルウェー海流の恩恵を受けた港は、冬でも凍らないため船舶の行き来が容易にでき、フィヨルドの入り組んだ地形は天然の要塞となり、侵入者を防ぐには格好の地形である。このように地形的・地理的条件に恵まれていたベルゲンは、ハンザ同盟が外国に設けた拠点、ロンドン、ノヴゴロド、ブリュージュと並ぶ4大商館の一つとして200年以上の長きにわたり繁栄をきわめた。

### 特異なハンザ都市

ハンザ都市の中でもベルゲンは特異な都市であった。ブリッゲンのハンザ商人たちは独身が義務付けられ、地元の人、特に女性との交流は禁じられていた。倉庫兼用の建物内の狭い住居スペースに押し込められ、火災防止のために暖房も禁止されていた。このように厳格な規律に縛られて暮らしていた。

商人のほか、職人や弟子などがブリッゲン地区に居住し、最盛期の人口は2,000人に達し、ベルゲン全体の約1/5を占めていたともいわれている。

しかし15世紀になると、繁栄をきわめたハンザ同盟もイギリスやオランダ商人といった勢力に押され、次第に衰退の道をたどることとなった。16世紀末にはベルゲンにおいても、ハンザ商人たちの貿易上の特権は実質的に力を失っていた。そして1754年、ブリッゲンのハンザ商館はノルウェーに引き渡された。多くのドイツの商人たちはベルゲン市民となり交易を続けるが、それも徐々に衰退し、1899年には完全に幕を下ろすこととなった。

### 商業活動を最優先

ブリッゲン地区の建物は商業活動を最優先に設計されていた。

ブリッゲンのハンザ商人は、主にノルウェーから干鰯を買い取り、各地へと輸出していた。またノルウェーには穀物をもたらした。船から揚げた干鰯は荷車に載せて倉庫へと運ぶ。商品を濡らさないようにと庇が張り出した廊下をくぐり、2階や3階の倉庫へと滑車を使って持ち上げる。実に機能的な造りである。

最盛期には荷を積んだ船が列をなして待っていたという。そういった状況の中、円滑に荷を運搬するためには、荷を大量に載せた荷車を引



写真4 石造りの倉庫

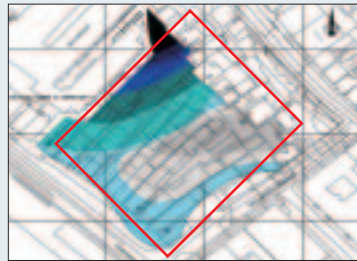


図2 2005年時の地下水位、濃い部分が地下水位が低い。赤枠内がブリッゲン

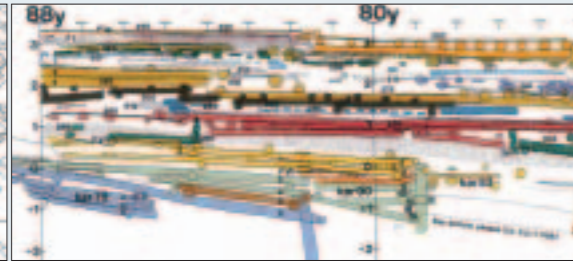


図3 ブリッゲンの地盤の断面図。何層にも木材が埋め立てられている

近年でも1944年にドイツ戦艦が爆発を起こし、それによって多くの建物が焼け、傷付いた。1955年と1958年にも火災がおり、本格的にこの地区の保護や修理が必要であるとの気運が高まり、1962年に「ブリッゲン財団」が設立された。

ブリッゲン財団ではブリッゲン地区の保存と修復、情報発信などの活動を行っているが、最優先事項は火災防止である。建物内部の天井を見上げると、必ずスプリンクラーが取り付けられている。一方では消防車が入れるような道も造られている。

何度か火災に遭ってきた地区であったが、そのたびに復活してきた。焼け落ちた瓦礫や木材を埋め立てて、その上に新しい建物を建てた。ハンザ商人がいなくなった現在でも、ブリッゲン財団やこの町を誇りに思う住民の手によって、ブリッゲン地区は今も存続している。

何度か火災に遭ってきた地区であったが、そのたびに復活してきた。焼け落ちた瓦礫や木材を埋め立てて、その上に新しい建物を建てた。ハンザ商人がいなくなった現在でも、ブリッゲン財団やこの町を誇りに思う住民の手によって、ブリッゲン地区は今も存続している。

### 傾いていく町

現在、ブリッゲンの建物は店舗や事務所などとして使われている。その建物群を正面から見ると、多くの建物が傾き、歪んでいるのが分かる。入口の扉の枠が歪んでいたりと、門扉の左右の扉で大きな段差ができています。なぜこのような状態になっているのでしょうか。

実は、現在ブリッゲンを悩ませている問題の一つが地盤沈下なのである。昔から地盤が沈下してきた訳ではなく、ここ20～30年で急激に地盤が沈下しているのだという。ブリッゲン財団ではこの地盤沈下の調査も行ってきた。地盤性状・地下水・交通量の増加・建て替え後の建物の重さ・環境問題など、ありとあらゆる可能性を探ってきた。その結果、一つの結論にたどり着いた。

っ切り無しに往来させる必要がある。干鰯を大量に載せた荷車は重く、土や石畳の道だとスムーズに荷物を運ぶことができない。そう、ブリッゲンの木製の路地は、荷車を円滑に移動させるためのものだったのだ。商人たちが最も使いやすいように配慮された木の道は、商業に特化した町であるブリッゲンならではのものなのである。

確かに、一見優雅に見える石畳の街並みは、歩くと意外と凹凸があることに気付く。石畳の道は、旅行用の大きなスーツケースを転がして歩くには向かないことを、身をもって知った。

ブリッゲンでは、景観よりも機能性を重視したストイックな街づくりを行っていた。歩きやすい木製の足元からは、商人たちの商売に賭ける心意気が伝わってくる。

### 火災による焼失と保存

道までもが木で造られているブリッゲン地区において、最も恐れられていたのは火災である。1702年までに少なくとも7回の火災に見舞われ、特に1476年と1702年の大火災ではほとんどの建物が焼失した。そのため現在残されている建物は、1702年以降に建てられたものである。このような火災から貴重な商品や書類を守るため、木造の建物の奥には石造りの倉庫も建てられていた。



写真5 ブリッゲン地区の俯瞰。右手の低い建物のある範囲



写真6 ジャッキアップされている修復中の建物



写真7 床下には瓦礫を敷き詰め丸木を組む

ブリッゲン地区内において、最も沈下量が多いのが北西端に位置する建物であった。その隣には1980年代に建てられたホテルがある。今まで、後背地の山から供給される地下水はブリッゲン地区の下を通り海へと抜けていた。しかしホテル建設後は、地下水の汲み上げなどによりホテル下の地下水位が低下してしまった。そのため、地区内の地下水はホテル側へと向かい、地下水位の低下を招いた。これにより、地下水面下に埋め立てられた瓦礫や木材の層が、地下水面より上に出たため腐り落ち、地盤沈下を引き起こしたのである。

### 残すためにすべきこと

ブリッゲン財団では現在、ホテルとブリッゲン地区の間に地下水の漏洩を防ぐ地中連続壁を打設し、地下水位を下げないようにする工事を計画している。また地盤内の木材だけでなく、建物の基礎部の木材も腐ってきており、それも傾きの一つの原因となっている。

1999年、「プロジェクトブリッゲン」と名付けられた試みが始まった。ブリッゲンには修復が必要な建物が36戸ある。このプロジェクトでは、建物を修復することはもとより、必要な技術の習得や人材の育成を行っている。

建物をジャッキアップし、床下は瓦礫と丸木を交互に敷き詰める伝統的な工法で基礎を固める。隙間の大きな瓦礫を敷き詰めることで、降雨時や高潮時には水がすぐに浸透できるようにとの昔からの知恵である。この方法は木製の路地にも使われている。

壁板等は当時の木材をできるだけ活用し、新しい木材を接ぎ木して再び用いる。新しい木材を用いる時もノルウェーに古くから伝わる伝統的な工法で行われる。この修復工事は以前と変わらぬ姿で残せるように、財団が一つ一つ手探りで工夫して進めてきたものである。

大工たちが使う道具は大振り、木材の表面を鉋掛けする訳でもない。日本の家屋と比べると、造りはかなり大雑把に見えるが、彼らは「もともと倉庫なので、こんなもんだ」と笑う。この伝統的な工法を身に付けて修復工事を行う大工は、現在7名いる。この人数で修復工事を行っても、一区画の建物の修復に、まだ数年は掛かるといふ。このプロジェクトはまだ始まったばかりだが、少しずつ着実に進みつつある。

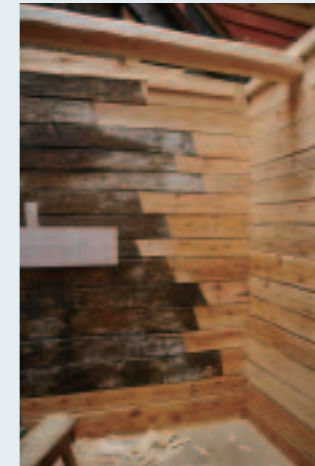


写真8 古い木材に接ぎ木された壁面



写真9 年季の入った台車

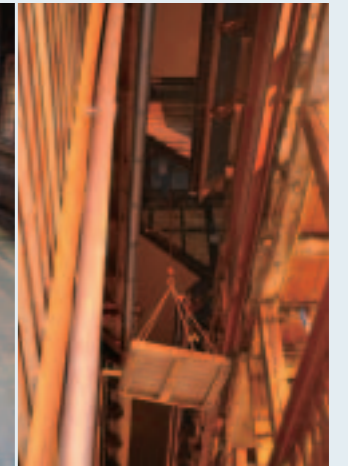


写真10 夜のブリッゲンで見かけた荷揚げする滑車

### 夜のブリッゲンにて

1979年にユネスコの世界遺産に登録されたブリッゲンは、ノルウェーの中でも有数の観光地である。

ブリッゲン地区を訪れた時、平日で雨模様だったのにもかかわらず、多くの観光客がカメラを構え、歪んでいる建物と記念撮影をしていた。このちょっといびつで愛敬のある建物たちが、そのうち地面に対して垂直に立ち、規則正しく列を成すことになるかと思うと少し残念な気もする。しかし歴史的価値のある建物がこのままつぶれてしまうのも忍びない。しかるべき修復を行い、時代の生き証人たちをこれからも残していくことに価値がある。

夜、ブリッゲンの路地を歩いていたら、上の方から物音が聞こえた。見上げると滑車で荷を吊り上げていた。足元をみると台車も置いてある。暗くて何の荷物なのかは分からなかったが、干鰯でないのは間違いなし。まだハンザ時代と同様に使われている施設を目の当たりにすると、何だか妙に嬉しくなる。ほんのりと灯る明かりに照らされたこの町から、「木製の路地も、滑車も、建物も、まだまだ現役だよ」といわれているような気がした。

#### <参考文献>

- 1) 『週刊ユネスコ世界遺産 第52号 ドロットニングホルムの王宮/ベルゲンのブリッゲン地区』2005年8月 講談社
- 2) 『世界遺産DVDコレクション35』デアゴスティーニ・ジャパン 2005年12月
- 3) 『ハンザ同盟 中世の都市と商人たち』高橋理 1980年 教育社
- 4) 『SAFEGUARDING HISTORIC ATTERFRONT SITES BRYGGEN IN BERGEN AS A CASE』Stiftelsen Bryggen 2004年

#### <取材協力・資料提供>

- 1) ブリッゲン財団 (Stiftelsen Bryggen)
- 2) Multiconsult A/S
- 3) Mariko K. Hauge (通訳ガイド)

#### <写真提供>

- P12上、写真7、10 中村和也  
 写真1 初芝成徳  
 写真2 藤井千晶  
 写真3 佐々木勝  
 写真4 塚本敏行  
 写真5、8 ブリッゲン財団  
 写真6 佐藤尚  
 写真9 和田淳  
 図1:ブリッゲン財団  
 図2、3:ブリッゲン財団/Multiconsult A/S